雪颪

蓼太

へ 5
1868

序

去らし出月れ来つらきよそつきれ康の云
れ紀ましる沙門と称く孫子の後つ出
の久るきと宝の世月安よ而まて闕
神あれ北ま盛る入門のれし一書を
持来り会や江戸の親族のもとり
そもそもやせる洲風し玉ふまし
やまと猿れるし此猿ニ文
なりて子弟阿名の其道おりしと
不審のしきよ思ひ問ふ
紀く闘北又続よ江戸廿歌仙と題

宇野文庫

へ5

名抱竹にし白は其角之生れ深川と
ゑらし月之ほすとも多し安ナかけく
風抱は西子れ流ゟ多く東都す
出て又多くを経て破る我に住を
竟也ここ四季少経しを又其人の
作者の内年へ抱ふ旧知の人々も
ゑらしまいう年出経と翁やと
がい中に終れを生ぎれそれ宝の国か
この墨子をなして翁る碑従の言葉
作しなる人々止むてかれひとつなれば
作年の名をとうこうし作るとなる
しの冊をあれ事ぞ見らざるべくあやし
の一冊出る為し人へ白は深川も
文巳当也及たまへしたまはるとく
之くらも出しくもれを[illegible]人の筆と
あしくし人は始見るを[illegible]とは作る
古をし録[illegible]

旅人[illegible]其と

宝暦二申の[illegible]川る　如[illegible]

井蔵[illegible]作着

郷十　横川　醒吾　泗水　来光　春[illegible]

和桃　百原　秋鳥　平[illegible]　紀逸　不[illegible]

荷流　再咲　孫[illegible]　乙勝　買[illegible]　蟾[illegible]

秋風　馬訥

問曰　此丸翁仏の序に正風は元禄仏を
まねたる翁の花之此丸翁仏ハ正享の仏の
花をしくして文の實をうすくすまし
俳諧の変化を時の花に流行とも
正風の姿なれハ言よりしゆ去正風は古今
よねしはこれを正風と翁仏はあふ
ときは深きも如芭蕉門に用るハ是の日
猿蓑炭俵もなるへし　其角之
其との門をつ用ゆ　いかて若日覚
不審也　其れハ元如正風の證の

俳風ハ東流西風　宗因律にさく乃翁も
宗匠と云し時に正風丸翁仏の付句
桃青門人と云　秋より史貞享甲子の
冬尾張五翁仏に俳諧の古体を破り
猿蓑と云春の日に出して　のち瓢　曠野等
正風をひらき其年　猿との集におゐて
安條定る然　此序ハ翅十年ばかり経て
まず其角　芭蕉翁の趣意と語て一統
と貫之の文法其序に家系稀の句を書
に傳をし識に覚をすて　芭蕉の花
とも實とも中合して此流ハ其角

序りくハしまれハ中に遊ぶに及まず
志られハ今の底の宗匠達をも志
らぬてハあるまし近世の古歌仙を
上世の俳風未花に用らるゝに深き
意味あるやこゝに

近世廿歌仙

蓬莱鳴るのおゆへつるばれハ
神代のむかし鯨牛蒐
血あるくかゝれの之りこぶて
猿の中しそなしきなる

又

夕月の空い狐まて月を隠し
花ハあの世の一西氏のとめ乞

又発句

猫の恋あらわれていかゞ狐ひろ
抱花も人序と遊て後の定家と候
天和近宝古音の気こぬし花と花と用ハ
近きやうよ得無風と近るゝ餘之甚角流
いし無まて氣近ふて近宝近言ハよ紀
求歌紀の對なれから風よりおもしろく
ちまうや又ハみめ川おもしろくおもひ思

多きなかに代々の秘撰を嫡古人あり
編る俳集に素序あるを撰ミ選ハ者
心を合て開るあとて七十余仙の韻を
尽す月も花も発心にちりしく
四時の流行ハ尽くる事なしハ去年の
春と云ゐし如くなれバ古老も死
うせて高弟の家師の志ときも俳
風をうとき化つるかりしにまれてき境
まハ流と蕉門の白眼を伝へ古風を
守る人く多し然るに東武ハ蕉流の
系正之の門人に其角嵐雪を始とも
書れける中ニも其角がりける集編ニ依
停人半か多しも孫弟子等之事通して
歴々の宗匠達の撰ざれバ深き意味を
あらんまハ去りし 又同日七十の毛ニ
知らざりし 野紫なる又如くなる 素我

又十毛ニ
天満橋下神なりや浪花橋 秋風

又十二毛ニ
石なる編見なる好子なる 渭水

同じ毛ニ
松出る象潟けて死處

芭蕉一派のゆかりをしりたらんきく事
もや後学のためなれ

蕉門ならば此集ハ一派と云門弟十人も
拙作なれば以てかゆるし給ふ事あり
なるし此集編の時其所にとゞむるべく
まし他の作も多き事ハいはずとも其外
先後論合点無之事一派を読時
耳ありかよ此不審と其事流派を八
蕉門は拍子とて云ひて一巻此法より
まる時々又おもむきたる句の謡きける
きゝしらるまゝ申之事花や鳥をとりよ
知りたる人へ例をも習ふ事ゆしんに
無蕉門の拍子をも見る時ハ手紙によく
必三ツ降出ルに及ぶ毎の拍子ありて
云路の拍子ゆゑあるひは色の源氏師
わ三足猿より
撰もちの三ツ巴あり三ツ巴人
音れ行けりちよろくと音
されは拍子之下拍子橋花橋の織法
要あるよし二ツ巴三ツ巴あり音
竹の段落しの拍子に従ひて志

俳諧や此家元の為と申す者多
無学の輩なりといへとも貞
徳ハ琵琶行柳子と讃へ伝へ
きし雅や君の花ちり星月夜
其の幽玄を尽して無量光花
坊の古今にありとしても芭蕉門にしも
みなりける人に比する流といふへく
蕉の梅咲ける影の詠めく
書れみる花の催を詠るかな
此たれハ俳なき人をおやまなる多し今此
三ツある連歌に達ハ言ふに不及又俳諧の
連歌の俳諧にまし言葉をもし
当流ハ俳にもみちなる読ありハ
おもしろく俳諧のつらね子をとらす
ものつらね斎の龍しれいかを説しく
故人や正なるハおもしろくして修
をなれハ蕉翁其角嵐雪なとの
の俳士におもしろくやするもをよ評もおも
しろくいふれいふなる是を読める説く
まで俳諧をもさとも海為の調て正まり
人にも此外にみるへきこと前後もさりて
正せるる子三神の道具を思る所

梅翁風ハ二百ヶ條を定しめきを誹諧
ちりめくて十躰法よりて先去ちとも其定一西
化をわけゆきて後支考七名八躰を作る

十躰

其人　其場　時分　時節　離附　遠附
遁附　向附　色附　理附　景附　響附
響挽　叙

古蕉翁か嵐雪　因竹　支考　其角之傳
其角　作哭人の原松傳

七名

起情　向附　拍子　色立　有心　会釈　遁句

八躰

其人　其場　時分　時節　天相　面影
時宜　観相

貞舟　空撓
来花伝　再案

十躰法ハ創るに條秘之遁る流とも作文
其門古の附合よ高くして見にしく時ハ元来似
の内十六体なしてハ蕉門の筆ひとつ叶
ひたる体なし　其上一句立を繰あはし　いまた
なれハ先も蕉門にて独立の席まことの
ひとつあれとも一毫の内一二ヶ所にて傳有て

見ヽ十為し原くの色とかく云ておとの
業なるゝ家あしきを人丈あるを顔破
去ル戊支能醜りし也 数丈其角嵐雪ハ
蕉門の其子の高名之人東門葉より科何ハ
正しく化つのそこ里を得く為きす
まあしますや

すゝき 湖十

梅折ハとの里もうこし月夜かな
神いかひろし一雲中の末
大名の先哉の小為楼そく

此る頃居りて独吟なられ梅折しは
或者も翁く答之何とか出らしく
云之く意味少しもなし嘯月浮翁
そこ子白とかきりまる事や也免く此句を
梅折もとハ色も也る月夜かな
とさハ春湖の見舞も有りて月夜かな も
おもしろとて能きハおもしろ蕉翁の
古人の趣の句あはれて有秋師
近来見様之く云月浪をゆく
県川より富士の氣高き浪干也
画に描しきその翁き近く国子ハ

先にも同し汐干なれハ花の氣ハ尤も成
箕之扈ゝ陳しては其の翁無筆より
右十六編の流るゝ扈ゝ陳しくも
翁ハ只理合也けり極暑北窓清風
兵後らく梅梅わハの服ま

神ハ奈ひかり雲ゆりの末
先其ハ紙ニ梅香あるしまも色之時
其夜其中にハ奈先く花へなるまてまて
端せし題之もし紙ハ速読なしらく
大辞の流る百
新撰對琢　表道傳　紀時須臾
先を流しらく一抽きの端之古人勝を
まれもるゝ多くし彼岸翁の其の日く
いふ集つきより一題の季を扈ら服其
兵後るの末流と存して一るに借るへき求
めす所とす一くも与くらて出る乎

梅わまいては已もうつて月夜ハ
神子ともの花の　公達
残さの一杏の散りうる　垣
娘の白ハ大丈夫人の群狂そ花遣人你如
居し後幸は紀梅のましおに婦く
杏の散りうるにハ梅わの難ひとも

附文字渡の月あさ中ゟ勝を以ざりけり
と云然ハ其句へし　此二句の能きにハあるまじき
一向附然とハ云事なし

第三

　神輿之雲井の末

　大名の立願の小鳥哉

第三ハ一勝法場ニして又句作百枚歌
たゞ山なとゝ云事ありて向ふへハ歌子に解
なとも云何きし顔の附合とて脩ひし
くりして附かけるとも其に嫌まじき一句
旭に波振る一句の格ひく前句ハ二句格
えり句かも風の深く三ノ附ちなや
秋いとりひとりをこそ候第三のるを
なましハ高き哉雲井の末ゆへ云前さなれハ
去山荘なとこそ候へく

　高嵐よ端山の春を配らせて

是も附へき事山かいなくて然し

四句目五句目

　大名の立願の子

　鳥も見れとも風の汲

　一艘も二艘もと為　濤つき

此句目五句目　又むつかしき附場之事

此月をかゝへしゆゑまつりのたねとしたる
人なりしも其年にかへしまするは其々に
酒令一月は出立の祝ひ事に馬は此月
月まゐりすゝらひ端午の節句
の朝より合くもかゝる節句さゝぐるしも村
書立る夕暮とさゝえて見る人へ時文
一月も此月に叶ふなし此事に臨ば
大名の定紋のかたち
端午を以て振舞ふる其則
此月かざりたてゝあしらふことも五月は富士
賀茂祭の図あり代々の其まゝ
もまたる縁者のおもしろみ之縁は風雅の
ためしも多くして古人の申されしことか
世の中にも多く別有合することやありけるも
此ころも此縁に多し

六月

鳥を又手のよ
一雛に二雛子をよしよし濯ぐいへ
花菓子の一日洲浜は花鳥人もある
所のさしあひ之事にしも縁者の言葉
なり毎やさまぐれに振るぬ蘆も
限りて侍るも三月の習ひ一つ之一ツ定

かゝるも寝し坊の中に籠る所へしかも
熊谷の方へきハ表なり鳥に息まいる
目明けハ
かつをと足近は取し西の陣
麦畑のほとり拖まハ康をなり
ともなへき鳥ハ鳥を足れはむし西の
陣とこうひとなハ陣を懐しすこし
の岸立陣ろくそとし拖まハ康中と
り人将な箸中の付しらひせかく
一列して難波もんハおしかく蛇一党
表迄にて見て別して最後にて迄して
先より走ぬしのうら月を立つ前へ
中へし先代も走上の林ふ合ハ
御殿のおひよおとを待迄より
谷も色く上下の石に
打つまうて生高坂の旅寺の秋
かやも生高坂とえは京大坂後序
木の御城より高ハ勤土御殿して
大坂ハ西国を押へ二案ハ皇都とも護
しも弟護ハ序へまして武江は迄し
以て排谐の流笑なまりハとこそかし

こゝろなる句をなまめや連歌誹諧に
至りてはいまだ名もなく己れが心
君とも隣神佛の加護すともあるへし
こゝにおいて色られこゝろよ感動せます
時代小町か歌を思ひ起して白く
兵角か夕立の哥よ雲を起すなと
色をあるとやかけあつまりぬれ
其ハ蝉丸尾能の句ますきゝ新親
子兄ますの月のみ斗にあきこゝろ知人
あつうく問ひて以て尊ふへきや詳す
前句之ハ蕉翁も手に其句に及ぶの
秋とばかりさくに芭蕉の為には人
秋風の耳かと記とて見記一生読にし
上句をも志にし此をもって其余我推の
宗とも書を見れは古人の志免し
さかく撰ふるも勢を加へて諭蘭
なとはど婚なるハなりきに因散の
枝折作る絵は一具あつく能のある
まうさまは清まり作る

蔓蔦移し原しハ思をな
うは西国句よ畑の夕陽
都布よ小便しもたゝかるも甚へしかれ

あつまるは雨中色なれ黒きにちかきハおほ
しく及といふ今のうしく跡るよりおほかた
世中まれし縁附の合云ともいふ家に絶
し
御猿の衣ひきかへを作追り
名もさぬくに下の丁のに候
花はるよ生んとなりハ古の此様つ
いそくるハ心あへき猿人とて
玉味噌も刻ゆく家の家桃
無邪の類味噌木曽路の玉味噌よ
西之礎ちる哉人の姿たらへしきりく
ばるまいかへりしちまハあし様とたつまるは
ほいまいりたまへん也
寺二階ハ岩に
明星のむかひ合ち蝶の那
菜の花の菜の葉のむすふ菜の花白
ば胝記れも菜の花の葉をふれハ蝶の明星
ともむかひ合たる付合と附たれハなしかひも
ハふ色をさをむすふハたつをもむすひあや
花ぞ初心の迷ひの海をかうしく菜の葉の
むすふへきハ人ともに菜の葉の花ちらん成
へし菜の花の葉ハ二月出しかいまうちなる

しも我かたへし　又おもふし君に　くるし
表りしく鼻血の表わり荒
右ハ思ふ事へ訊きてる事
角文字のいの字とも無字かくれら
先ばるを好くるすハ返事後家女房娘
柳かしらの栽も恋ハ定きて花前白き
足定すしてハ恋もかはらぬ女房
娘とハ傾城にても人倫のよれ
あつくて皆恋の身すもかへし
後家とも是か時もかへしもそれ
この思ふハもちろ所行拔れらふ
るへかい一老柳古老人ハ或房まく
表やせるの後家と二廃とも
もくせきも芽無去すの法為の
時さるまする無の色かおすれも後家のく
いかるれハすて女きく其かるらく所ゆく
中まれる粉者きし小し也个云経無言
く所るい河無血の表へ見へて
たるへもつしれて女房の初二千ん
所立ろちまて所己文もてあるく角文字
のいの字とそへ家となつてやすなるハ法灌
あの被まりくめはも乞まも白保し
以下急

是にて叶ふ叶ざれはきらはるへき場所
れなくと
面ヶ思亭へ取くせる事也
二日ころは彼の讃無小六月
翁へ西のおしよみ日の光
秋の作句は掛ゆるまよ波濤や此山家
尾なるへく後の為其時分まて旭の如う
知れまは為後の千世のおもひなり
女房り立ると聞へはなしとゝむ
るまもなく又身ひの花り
大名がむかひ会せる花さかり
桃ともなくもまみた濃
此三章は句取るれむかひ会せるくりきの
終りいふ付と実よ嫁して一聖の
世並行まて帰してまて天られ見る
のおとなり或は勝劇の或は進むれ不の
叶ぬ又発句の句取る川柳思ふるへく
旅ども舞よ咲かへて猿子虎の間と
調る用なり推しに付之詩又時揃ふるよ
桃も美しくおかり此門はもして蕉
まは花楓筆之桃の夢は表なり
寺三　如雁

出替りや桃の家の主が所

右は其の宗祇是の叟

まくえ□あし老木所思ひ□きたり、

是とい□□る所ると聚らぬらく

春まちあらひら此家るを揚は

桃の家ならい□あつらんと

深く貫ゐて釉のまゝ□

かくれ道ハ手向け意てハ如する道と候

此年の思ひ出と此寒へ土江の詠ぐるへ

き繁定らく親文の東ひよ来る筆

の胴面掛流へし　又

壽ハ者ハ乾る菜の子

只それ自然の花ゐるしきハ

古道ともて一毫の野辺なら筵かい山居

草庵桃の舟しもて一印み変也寂木を

創の花戟中村の侍らもゑて

免王ハ姫らハ時も浪を

かくれハ其文ま其の子れ常気とかへ給

浅作し而て細之ほう春る定めの今も

のちも世まあまねたり

寺にて春花

猿吼る遠山の月

松茸ハいつれもいふとあれと松ありて
其木気のむきたる処に生ス所謂ハ草ニ生九
主へし一条ハ松茸の男根ニ似たるハ
松ふくりともいふ名也へしさ
あけとハ一名文白しといひてそ[illegible]
なる事て[illegible]訓思ふにかたる
ありくし岩茸の群生の所と
治法ハ酒に云点ましく今服しる文
[illegible]裁へ[illegible]毒せするよて是也
とふく口伝ありへし出れハ此とも此
専らしさ[illegible]とも好む[illegible]あり[illegible]
[illegible]那[illegible]煎[illegible]用の
[illegible]の中に[illegible][illegible]なくく
其人よりあなつりもく其間に此治の
なす事と[illegible]之比推[illegible]山の[illegible]
早なるハ[illegible]遣に見えなくく[illegible]山もたと是乗
なましくあそり[illegible]中くあるとえ[illegible]時ハ
この推物かう大凡志の酒ハ酒ともに落
人もあ[illegible]あるれ高人ともに所有ハ
浦あつしさとも此あらしく人給
の用あるハ
推ありて遣て山又[illegible]

こゝは何とも気もあまさを諸ころ
かう出ハ皆さされ里の荒くて狼ハ
夏なりと猿の声も明朱して鳴とち
ぎるへきりつ又名所の青ほしかり
下総生ても一つに打ぬ吉之はし
めしそへハ大かく元日の気
万郎とのヽ猪本猪道みてつて
まつりハめぐひの花ハ浮きちらしひ出てる与
まりもほそ燈く美を二つまつやめる
あきして古人のりし拾くいさすせたる
猪も拘道とも皆々用ハせきて合日く
其名の元日の気ハかくおはらしく
猪よ拘ゆ出ず一座へ来なきをしおかしき
すゝみしよ花のるさを打拘ゆるへし
之今ハとく見へたる端百喜孫人も
見乱しくあるへき事花とのミ並
其是をは衣ねつくろひたす通なき人伯
一両作りて例よ一句れ西白みせ好き者兼
をあやまちおるかくのめしも下絵皇れ
吉之はしよ元日の気も何のさすまや
まれとかひまち子を探る○ハおもしろハ
下絵皇ても一つに打ぬ吉之はし
〽

都のおゝるなしの正月

声をおかる万才に花の相乱
かしこまれハ蒼色丸左烏帽子を春日と
神ましくたかうく旧都の縁武部まる
春も以尤気三ヶ日ハ音楽ハいさまじく
ならう雲に花の旭のきしかうく公
大黒帽へきしれかるへしや白ハ勇に液々
よきハ見る所あるへし紅梅に元日の客
撰者まうおとなしやいきと

きよる
見よりるとせ老舗路にむかふる之
春六　年始
揖鞍ハ添む芋とあきて
角力方左添にまめ合
ひすきの糸かハ担ぎ方おも
日出水ジつす翁る八角力れる我とれ梅
うり洗こ小与延てるこふ出へし極く
与さる化ありし先を見の人も走絶
まよ歌の有首ていねえ太水ごし年
牛まるゝすで角力ヶ歌と様ふまや
前句よいさ咲もり人へす
読の依巻の門く探るく

せめてかくのすぢひとつは足弱く採也
香る鶏集の中にも彼角力の付合しらぬ
押分て出ると頼まれて書ひしるさぬ
ものあしきに端れ給ふ歌なるへし
十七番　俳
若竹のかはりや雪見の色
いまきりの子も邉上る句
かしわ木いかなる歌とむすひ
式服四季の七十二候と讀分て
風流古人ともなしいふ文字にて詠る
めならはさてそ句には作りもせかねる
きわめても邉上るやうしき眼に滅て
まうく色合ハ務て雷を起し若井の
御はうし昭ハかれまりも蛇も邉上る
あらはれて是ハ理念にて秋あらは我
も眼する手向をもしまつ文下に
おもいる心と易し説きもに見えれ
若井の何を夜くそしま
常時なる聞のを編
星下りの娘に隔なと嘲きそく
くし家またハ花咲ちるハ夕立風のそく
語とも云へし若井にの生涯

又あるへし　まこと三ハ於作花交躰をなしうへ
即席の儀式略して小あそひのうへ
まこと八　祝遊
参銘の花の中ニハ牡丹の
上手の建し新家の宴
此座なるハ一部の衰退なるへし其所ハ
空きて晴ゆゑて前葉ニ成らるの
親もいさ競しあうと花の中のこと
当てとりて花の大輪と人もてはやし
其時ハ見されハ見へより紀のハ此所ハ
縁台ニ茶席の遠ひなし上手の建
之七夕まつるに用なしの茸と家々
あるまし思ひ寄りなや
前葉なる者ニハ即席の中位
かしこきを催ふるニ前葉花あらそひ
五元年の即刻にハ遠へし此心者
発句斗なしハ申しゆるしかるへん
まこと九　買所
とりの庭にも大月ハ雨とかへりて
此子の女房ふさしめ夜更まして
花そのもと勝劣競争のて
上手の句のほと高ハもつとしきいゑせん

卯ノ花にしてハあやまれるも多し　廿二句
皆まされ買ひ取りたるハ抱あるも有りけるを
ぬすミ取り又嫁ぎ源にけ縁との
並みなるやとなりてハ皆とがましむ
うしきてをぞ侍りしても下ろす多く
思ひはしく取りなしそて皆よう

又

目のちまり紀にも水車あり
思ひおこ気の流る思縁汁
胴
胴人形のころしとこ
入りまじも作るちりまま　廿細人形くさ
おもゆりぬすり思ひ侍りこそうけの白こ
より見たしまうや花ホ又手すき
石ろりまう気のありなる思縁しけるかハ
鞠子の君とも見えし政翁れ梅と若菜
の君と思ひおりまくと
捨この集まし年なりても
ゑもいそ為ゑ義のうけ合ありて石も
納人形まんあまりおこるまじきれ
寺十秋風
ワキ分揚句また年ありハ流中万の篇
宴ハ昨も給ふみ

守山　梅川

可しなくてまし井の縁
低見せる唯識すらし　又唯識
ならの八幡山の百姓
しける盛門まし嫁なする苦尾城の
梅川ハあるき中に
梅田ハ辰のほとり薦まで
大地にひしのつゝくく破浪
しけるを支考が離して日大地にひしめ
つゝくとは梅の梅田のそるしき情を
逢ひぬるハちここ其あるにもまきましく
其場の寄しらひくるて言甚の
跡ものこして八雑の論をなく華の義に
風くるあるをはまひぬ山の百姓に給
しくしり見おすくゝりて他流なる
しまぬまて其他流を高き一集に
熱なれを詞さるよりあまり遠き中之
ねしくくれすしハ
探句しも古い書物
かくてい洒気の見物やよ雅みえる一芸の
中すも小口制て低見の唯識古板の
今人者も見えてしる俳諧者のこる

潤なるべし

又十二　渭北

人尾より直て序の秀逸

葉末よりうけて稲荷に至る

此一句すへて作の手に出来たる之眼に

会句の評ことにとりて感念して已とす

りのよし宮殿を主つきらにも

発句ハ宮の事にてありけるを

王の家臣にて思ひしとやまた此句

四文と人丁一とて口の中之あるしけるに

樹とし八束気に恐んとて

ね直す

楢回熱者の也悦ちも更なし

又十二　未

婦はる　當麻ハ角とうきなし

此あはる切字をくりの札切字とうしら

谷月に見えうり　をまをて切字の名理を

新しき彼に此れの名みを又まてハ古人の

何もいろは四十八字なしも切字たり

そくいふものいまし実とよし考へき

なりそれハ切まよ其の一の字もれまれも

他者のつひてたちまち妙中となる
やのゝ事のあるも不通き妙字も未熟なる
他者の心ハ妙字にあらで此境ハ至て
深秘 これを志らぬ口と見ゆ
又是七八ツ程も文字もなきなり
是字の上の句となりなハ妙字なる
はた理とも海しなき時ハ妙字
あきらかに判しえなるへし
まさ十四首原
六ツ七ツ下の字を添ひ出し
死六あまし脈を押つゝ
帷子の暁まもしくまれあるうり
さえるの海の家門の作者も叶まく
なまきし無し笑なへし 打越の添
引しる人々帷子と一続こせ作者も
暁を年四ツ思ひ来る色に見え帷子の
まれありまる夜今も帷かれ忘るゝ
うるさまかる他人の性を離れうれ家ハ
叶なりに言葉もまなりぬへし
はしかきまるまに下にまさ言
四阿よ雨吹乃きく 山風
婚の二句は四十九字にて夜あか定ゝく

りまハ三句目ハ発句の目もの変ル事よ
大切なる事其点の様ひ次ハ句を積中
の句を逃れ一ト句の取りてハ勝の一字も
ゆるすへからん
きすたに　和哥
ちりましも松風よ似たる古郷かな
ますすみ　紀逸
見ひと名人の見れや調代る
けふうこひく我宿まなりしも見けり思
人のけれや云ふ長閑流るゝ東ま川
能もぬて一とまれハ明暦荒節には変化
四時の句ハまことも其風姿く絡りく
其の句ハ眠し其の句り姥し松の句ハ
あハくおしく時句ハ海にあハ涼しく
海しきも時節に応して不尽して己か眠
云まる/まつつけるなきんと宮を云紀逸ハ
句ハ風り出りれて己か情をと之くしく
調代ちの風姿をある事伝る数多年有
海情の俳ハ東花坊なりし陸集ハ学
とぬきわれハ力しきて世にしれく
いまふ鎖く鍜ぬの流を読句を示
らもて下

我家ハ酒よあるゝや酒代ある
今ハかし年寄子を源氏
源氏物語ハ書をも見ざるや文庫
家に伝はる月の夜と言へる定家
月見は見ての月は猶あるゝ
又道も違ふ天の川なれはなるべし一つ
まる聲なるあはれを知る
月の猶まかゝる花なる
掛月花ハ眼鳩一筆まして古人其
庵をあまし玉ひて須の忘味ある
然るを一絶句ハ月も花も招く
あゝ深ゐいふ出来る但ある
但絶句は月花を招ひるが風帰なる
やあらうしやうし出人之此人ハ其門の
一方をも探らぬ我師ちゝまた事老
俳をて山のふまる人あるゝ思ひ給ふ
ししと此絶句月花の詠しまて
一見えぬるよ身をもて形乱なき世の継絶
きまする　再興
蕉大祖に思ひくいる所
師遠ひハ去人かましくと嘆き
此る哉いかで何とて師遠ひ去人ぞかし

また今日にいたりて思ふゆゑハ、当風の二つ
談林・貞徳の流なりし。談林ハ古風にて
むぼらしくきこゆるや、己が心の媚
思ひなりて、俳諧の本意をうしなふも
彼両の句も笑ひつけ、此是又見るまじきます
不易も此両ハ分別みちへきたる上、蕉門の俳
は清く、上手ハ又其角へ流れて、二人の花
在を忘れしかども、俳諧の教しへも偏遠
のりたる人を感ゆゑ、己が偏遠を去る人
為しも只不易も又流行に変化の時有るを加へ
俳の心やこれ然ど世あしくはなまちける八帖
へき是流行まゐりて、是非その本意なき
去りとて思ふへきハ、えて難一るへし
さりしめて中道、此二十余年の草を立かへ、口伝分
発句と一事も思ひきて、へつれて、おもひ
道ハ、別して中絶ゆらしける、ハ、其絶
ならおもひたまへつれ、即此事を重ハ、皆乞人
あられしまゝ是非ちからく、これと問ひつる
古としいかの又師中吹の高弟、其人老を黄金よ
枝とそめらるゝ道しれり、門弟にして其経
又文章記として残る集を推して師とせし
其園問を写して明和を寄して経り

一帖とうらゝ呂くす家門の高さをひらく世の
雛形をあつめまれなれは書載さやむ

吐月窓吏中